

意欲を持った学生による大学の活性化

大久保 貢

(福井大学アドミッションセンター)

【はじめに】

高校までの学びと大学の学びとの間には質的に大きな乖離があること¹⁾は以前から知られたことである。以前の新生はそのことを十分認識し大学の学びに対応していった。しかしながら、最近の高校教育において受験のための暗記中心の学習や受身的で指示待ちの学習を行っている生徒が増加している。そのため、大学に入るためだけの勉強をしてきた学生は入学後の学びの違いに対応できず学習に対する意欲が欠如している。このように多様な指向を持つ生徒の高校教育から大学教育への円滑な移行は大学教育の大きな問題の一つになっている。

これらの状況を考えると、今後大学に入学してくる学生の学びの履歴やそれに伴う資質は多様となり対応も難しくなると考えられる。そこで、高校と大学での教育の連続性と一貫性の観点から、乖離した学びの橋渡しとなるような明確な意図を持った高大連携が必要である。本研究では高校教育と大学教育の連続性の問題点を改善する一つの視点と、意欲のある学生を育成する高大連携のあり方、またその有効性について論ずるものである。

【新しい形の高大連携のねらい】

これまで福井大学における高大連携はオープンキャンパスや出張講義などできるだけ大学での教育内容や教育環境の正確な情報を伝えることにより高校生を啓発・刺激した情報伝達型の連携を行っている。ところが、これらの高大連携は高校と大学の接続を巡る目まぐるしい環境の変化に双方が十分対応できないまま一方的かつ単発的なものが多く、一時的な刺激になっても持続的で一貫性のあるプログラムにはなっていないのが現状である。そこで、上述のような現状に注目して長期的視野に立って継続的に高大連携を実践することにより、持続的で一貫性のあるしかも高校生の資質をいかにして伸ばしていくかという教育内容への支援を視野に入れた新しい形の高大連携に取り組んでいる。

表 1. 大学が求める資質

問題解決能力	文章表現能力	プレゼンテーション能力	思考の柔軟性	創造力
コミュニケーション能力	探求心	人間性・良識	語学力	数理能力
論理的思考力	自己表現能力	判断力	発想力	学ぶ意欲
			理解力	読解力
			注意力	

大学は表 1¹⁾ に示すように多くの資質を学生に求めている。しかし、これらの資質を現行の高校の教育課程で育成するにはより工夫された学習形態が必要になり、今の高校現場では困難であることが考えられる。新しい形の高大連携による高校の教育内容への支援を視野に入れた取り組みが必要な根拠がここにある。

具体的実施方法は高校生が 2～3 ヶ月間に 3 回程度大学に来て、研究テーマに関する講義、研究の実施、研究成果発表会などの活動を実施している。この活動のねらいは高校生が大学の専門教育を体験し大学教員や大学院生と交流することにより、日頃の学習意欲を喚起することと問題

解決能力、論理的思考力、創造性、知的好奇心、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの大学で必要とされる資質を育成・支援することである。

【新しい形の高大連携の成果】

(高校側の成果) 参加した生徒の中には不登校であった生徒がこの高大連携により学び続けたい意識が芽生え、将来に向けて意欲に弾みがつき不登校から脱した事や専門学校志望の生徒がこの高大連携により問題解決した喜びを卒業後も味あいたいと大学進学を目指した事が分っている。このように新しい形の高大連携により学問の興味と関心を持たせ、知的好奇心やチャレンジ精神を喚起したことが分った。また、大学の講義を受けたりして研究者として将来何が必要か、また、高校で今何をしておかなければならないかが分り、日頃の学習意欲を向上させたことが明らかになった。

(大学側の成果) アンケート結果から参加した生徒は高大連携により問題解決能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などの重要性を認識した事が分った。そして生徒の中から明確な目的意識を持った本学AO入試の志願者があり合格して入学した。以上のことは高大連携の体験と交流の成果でないかと考える。

この高大連携に参加した生徒の感想を以下に示す。

- ・ 普段の高校生活では経験できない貴重な体験をした。
- ・ 大学の環境について理解し、その中で何を勉強できるのかが分った。
- ・ 進学を希望する学科の勉強内容と社会の接点について確認できた。
- ・ 自分の進むべき道を見つけた。

【新しい形の高大連携の有効性を検証】

この高大連携に参加した生徒のうち5名の生徒がAO入試に合格して入学した。この学生の学業成績や大学生活の追跡調査はこの高大連携の有効性を検証する有力な手段である。そこで参加した学生の追跡調査を実施した。その結果、参加した学生の入学後の学習状況、目的意識、学生生活の満足度の項目においてAO入試入学生の中でもより積極的に取り組む意欲があり、ポジティブな情報が得られた。一方、学業成績において共通教育科目ではAO入試入学生の中では優位であったが、専門基礎科目ではやや低下していることが分った。今後の追跡調査として大学教育の後半部分での専門教育の成績や就職や大学院進学の実績などの多面的な観察によって情報を増していく必要がある。

以上のように、新しい形の高大連携に参加した学生は入学後、学習に対して意欲を持ち、しかも明確な目的意識を持って大学生活を過ごしていることが明らかになった。

【まとめ】

高校と大学での教育の連続性と一貫性の観点から、高校生の資質をいかにして伸ばしていくかという教育内容への支援を視野に入れた新しい形の高大連携が大学の活性化に有効であることが明らかになった。この高大連携に参加した学生が学内において周囲に良い影響を与えるリーダー的存在としての活躍し、学内をより活性化することを期待する。

【参考文献】

- 1) 鈴木誠 「学ぶ意欲を引き出す授業とは何か」、高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習ー12、121-133 (2004)